

B年大斎節第5主日 ヨハネ12章20―33節

〔直訳〕

20 だがいた 数人のギリシア人たちが 上った者たちの中に
ようにと 彼らは礼拝する 祭りにおいて。

21 そこで彼らは 近寄った フィリポに ガリラヤのベトサイダからの者に、
そして 彼らは尋ねていた 彼に 言いながら、

「主よ、 私たちは望む イエスを 見ることを。」

22 行く| フィリポは、そして 言う| アンデレに、
行く| アンデレとフィリポは、そして 言う| イエスに。

23 だがイエスは 答える 彼らに 言いながら、

「来ている **時**が ようにと **栄光**を与えられる 人の子が。

24 まことに まことに 私は言う あなたたちに、

もし 麦の穀粒が 地に落ちて 死なないなら、それは ただ一つ 留まる。

だがもし それが死ぬなら、多くの 実を それはもたらす。

25 愛する者は その魂を 失う それを、

そして 憎む者は その魂を この世で 永遠の命のために 守るだろう それを。

26 もし 私に 誰かが 仕えるなら、私に 彼は従いなさい。

そして いるところに 私が、そこに 私に仕える者も いるだろう。

もし 誰かが 私に 仕えるなら 尊ぶであろう 彼を 父が。」

27 「今 私の魂は 乱されている、そして 何を 私は言おうか、

『父よ、救ってください 私を **この時**から。』

しかし このために 私は来た **この時**の中へ。

28 父よ、**栄光**を与えてください あなたの 名前に。」

そこで来た 声が 天から、

「そして **私は栄光**を与えた そして 再び **私は栄光**を与えるだろう。」

29 そこで群衆は 立っていてそして聞いた者は 言っていた 雷が 起こったと。

他の者たちは 言っていた、「天使が 彼に 語った。」

30 答えた イエスは そして 言った、

「ない 私のため その声は 起こった しかし あなたたちのため。

31 今 裁きが ある この世の、

今 この世の支配者が 追い出されるだろう 外に。

32 私も もし 上げられるなら 地から、

すべてを 私は引き寄せるだろう 私自身のもとに。」

33 だがこれを 彼は言っていた

示しながら どのような死で 彼がしようとした 死ぬことを。

〔新共同訳〕

20 さて、祭りのとき礼拝するためにエルサレムに上つて来た人々の中に、何人かのギリシア人がいた。21 彼らは、ガリラヤのベトサイダ出身のフィリポのもとへ来て、「お願いです。イエスにお目にかかりたいのです」と頼んだ。22 フィリポは行ってアンデレに話し、アンデレとフィリポは行って、イエスに話した。23 イエスはこうお答えになった。「人の子が栄光を受ける時が来た。24 はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。25 自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。26 わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕える者もいることになる。わたしに仕える者がいれば、父はその人を大切にしてください。」

27 「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか。しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ。28 父よ、御名の栄光を現してください。』すると、天から声が聞こえた。「わたしは既に栄光を現した。再び栄光を現しよう。」29 そばにいた群衆は、これを聞いて、「雷が鳴った」と言い、ほかの者たちは、「天使がこの人に話しかけたのだ」と言った。30 イエスは答えて言われた。「この声が聞こえたのは、わたしのためではなく、あなたがたのためだ。31 今こそ、この世が裁かれる時。今、この世の支配者が追放される。32 わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。」33 イエスは、御自分がどのような死を遂げるかを示そうとして、こう言われたのである。

①文脈

①a エルサレム近郊のベタニアでラザロをよみがえらせたイエスは、祭司長や最高法院による殺害計画の標的にされるが（一一45―57）、他方では大勢の群衆を迎えられて、エルサレムに入城する（一二12―19）。

①b エルサレムにいるイエスに会いたいと願うギリシア人が登場し、イエスの弟子たちが取り次ぐ。イエスは「人の子が栄光を受ける時が来た」と言って、自らの死について語る（二二20―33）。ここではギリシア人の到来をきっかけに、イエスが自ら十字架の意味を語る。それはイエスに仕えて従おうとする者への勧めでもある。

①c 群衆はイエスに「メシアは永遠におられると聞いていたのに、人の子は上がられねばならない、となぜ言うのか。人の子とは誰か」と尋ねる。イエスはそれに答えずに、「光はいましばらく、あなたがたの間にある。光のあるうちに歩きなさい。光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい」と諭す（一二34―36a）。

①d これに続く36b節に「イエスは……立ち去って彼らから身を隠された」とあるように、公の活動から身を引き、弟子たちだけの前で告別説教を述べる。

②構成

②a 20―22節

②a 22節に「行く」と「言う」の組み合わせが繰り返されている。ギリシア人がフィリポのところに来ると、フィリポはアンデレのところに行き、フィリポとアンデレはイエスのところに行く。

信じるということ「聞く」ことから始まるのだが、ここでは弟子を仲立ちにしてイエスに会おうとしたギリシア人を登場させることによって、宣教されるべき救いの出来事が成就すべき「時」が来たことをほのめかしているのだろう。

⑤ 23―28 a節

⑦ 23節と27―28 a節が「時」と「栄光を与える」によって対応している。十字架へと上るイエスの「時」は、神が人の子と神の名とに「栄光を与える」時である。神は十字架に上るイエスに栄光を与え（23節）、イエスは十字架に上ることによって神の栄光を輝かせる。十字架は、神とイエスの栄光が示される場である。

① 24―26節は弟子への勧めである。24節で一粒の麦のたとえを使って、死の意味を説き、25節では永遠の命への道を説き、26節では弟子への約束を語る。

⑥ 28 b節

⑦ 「栄光を与える」という動詞がアオリスト形と未来形で用いられている。天からの声はすでに「栄光を与えた」と述べ、再び「栄光を与える」とイエスに応える。

④ 29―33節

⑦ 天からの声の意味を理解できない群衆に、イエスは十字架の意味を説く。

③ 異邦人の到来（20―22節）

① ギリシア人（異邦人）がエルサレムへと上って来る。20節の「上る」という動詞はエルサレムへの旅だけでなく、エルサレムへの巡礼の旅全体を表す術語である。異邦人が上って来るのは祭に参加するためだが、それは物見遊山ではなく、救いを求めてのことだろう。彼らはイエスに会いたいと思い、フィリポに頼む。フィリポは「行って」、アンデレにそれを「言い」、二人は「行って」、イエスに「言う」。

⑤ 宣教の動きはイエスから始まり弟子を通して異邦人へと向かうが、ここでは逆に、異邦人から始まり弟子そしてイエスへと遡って、宣教されるべき救いの出来事に向かい、イエスが担わねばならないその「時」に焦点を当てている。このように記述することによって、イエスの死がギリシア人をも視野に入れた救いの出来事であり、その「時」の意義に目を向けさせる。23節以降は十字架の意味を明らかにするイエスの言葉が続く。

④ イエスの言葉（23―28 a節）

① 異邦人の到来によって、イエスの「時」が開かれる。この「時」はイエスが「栄光を与えられる」時である。しかし、ここでの栄光は、23節に対応する27―28 a節が示しているように、十字架（イエスの死）と結びついている。ヨハネは他の福音書記者とは違って、神とイエスの栄光は復活よりも前、十字架にすでに現されていると主張する。神は十字架に上るイエスに栄光を与え（23節）、イエスは十字架に上ることで神の栄光を輝かせる（28 a節）。

⑥ 従って24節では、イエスの死の意義が「一粒の麦」にたとえられる。麦が地に落ちて死ねば（朽ちれば）、多くの実を結ぶ。そのように、イエスの死も多くの人に命をもたらす。続く25―26節では、イエスの死のこのような意義を踏まえて、弟子たちへの勧めが語られる。イエスに従う弟子の前には、自分の命を「愛する」道と「憎む」道がある。自分の命（プシューケー）を「愛する」とは、この世の命に固執し、それを自分のために使おうとする生き方である。それに対して

「憎む」とは、命を粗末に扱うことではなく、この世で与えられた時間を「永遠の命（ゾーエー）」のためにささげる生き方のことである。このようにしてイエスの十字架にならない、自分を捨ててイエスに仕える者は、イエスが「いるところ」に共にいて、父にも大切にされる者になる（26節）。

◎ 十字架の死にほかならない「栄光を与えられる時」を前に、イエスの心は「乱される」（27節）。「乱す」と訳した動詞は「かき乱す、動揺させる、平静を失わせる」を意味する。表面に現れる精神的な混乱や動揺を表す。共観福音書に描かれるゲツセマネでの祈りのように（マコ一四36など参照）、「父よ、私を救ってください」と願わずにはいられない時が今まさに来ている。しかし、イエスは「この時のために来た」ことを知っている。自分の使命を自覚するイエスは「あなたの名前に栄光を与えてください」と父に祈る。イエスが彼の「時」を担って十字架に上ることは、ただちに「父の御名が栄光を受ける時」になる。イエスは「十字架の時」を見つめながら、「父よ」と呼びかける。すべての人の救いを望まれる父の思いとイエスの使命が、十字架に集約されるのである。

⑤ 神の応答（28 b節）

① イエスの祈りを受けて、天からは父の応えが響く。28 b節「私は（御名に）栄光を与えた。再び私は栄光を与えるだろう」では、「栄光を与える」が過去形と未来形で登場する。十字架に向かうイエスの生涯すべてが御名の栄光の現れである（過去形）。そして「十字架の時」に始まる今からは、イエスの死がもたらす豊かな実りを通して御名の栄光が世の人々に示される（未来形）。

⑥ 群衆の反応とイエスの説明（29—33節）

① 「天からの声」は、イエスが神の栄光を現す者であることを確証する。「天からの声」は神の声であるが、群衆はこれを雷や天使の声と考える。神の声を完全には理解できない群衆に（29節）、イエスはその真意を説き聞かせる（30—32節）。

② この世に対する裁きは、イエスの十字架の死において最高点に達する。雷のように聞こえた神の声は、その到来を宣言する神の言葉でもある。31節の「世」は神の愛の対象というよりは、神に敵対する者の象徴である。それを支配するのは「悪い者（サタン）」である（1ヨハ五19参照）。

③ イエスは「地から上げられる」。ここには「地から十字架に上げられる」という意味と「地から天に上げられる」という意味が重ねられている。

⑦ 神の栄光はイエスの十字架に輝く

① イエスは十字架の死を父の思いとして受け入れる。だからこそイエスは「わたしはひとりではない。父が、共にいてくださるからだ」と語ることができる（一六32）。死という孤独と苦しみの極限にあるイエスに神は栄光を与える。この世には敗北と悲しみでしかない十字架は、神の栄光が輝き出る勝利と喜びとなる。神の勝利を確信して生きたイエスと共に生きるようにとの呼びかけが弟子たちに、そして弟子を通してイエスの言葉を聞く者たちに向けられている。

② 神の栄光は十字架に現れている。十字架の死は終わりではなく、新しい命の始まりである。イエスが死ぬことよって、異邦人を含むすべての人が「永遠の命」に招かれている。十字架のイエスに神の栄光を見るとき、イエスの呼びかけに応える者になり、「永遠の命」という実りを受け取る者になる。